

〔書評〕

伊藤誠『資本主義の多重危機』を読む

——新自由主義的資本主義をのりこえるために——

塚本恭章

〈目次構成〉

追悼ふたたび——未解決問題に挑む伊藤先生

- 一. 資本主義の新自由主義化のインパクト
- 二. 新古典派経済学の排他性と競合的学派
- 三. 金融化資本主義の脆弱性と格差再拡大
- 四. 日本資本主義をめぐる多重危機の特質
- 五. 二一世紀型社会主義への展望にむけて
 - 一) 資本主義への多元的オルタナティブ
 - 二) 社会主義の理論的基礎をどうみるか

結びにかえて——学問的に未知の新大陸発見
補記、伊藤誠先生との思い出

追悼ふたたび——未解決問題に挑む伊藤先生

世界的なマルクス経済学の理論家、伊藤誠先生が二〇二三年二月七日に八六歳（享年）で急逝され、二年半以上の月日が早くも流れました。

伊藤先生の遺著である学問的自伝『資本論』と現代世界——マルクス理論家の追憶から』（青土社、二〇二三年九月）に対して私は、『情況』誌、「週刊読書人」、『科学的社会主義』誌の三つの媒体に書評を発表しました。『科学的社会主義』誌に執筆した長めの論考は、私の新刊『いまこそ「経済学の冒険」を語る』（読書人、二〇二五年四月）にも所収されています。刊行前のゲラ校正をつうじて当該論考を読み直していたとき、それは私なりの伊藤先生への「追悼」文ではないかと強く実感しました（伊藤先生への「追悼文」そのものは独立した文章として発表し、拙著『経済学の冒険』に再録しています³）。みずからの研究者人生に大きな知的影響を及ぼし続けてきた恩師の他界は、何年経っても変わらず寂しいものです。

とはいえ、伊藤先生の遺著となる本書『資本主義の多重危機』（岩波書店、二〇二四年七月）に書評することで、私はもう一度、あらためて伊藤先生を「追悼」することが叶うのではないかと思っています。そのため、本書を丹念に読み進め、伊藤先生の議論としっかり「対話」しなければなりません。「対話」とは伊藤先生の思索を追体験することです。

本書は、I～IVの計四部、全一二章から構成されています。本書の全体像を概観するためにも、各章のメイソントイトルのみ掲げておきます（なお本書は伊藤先生が亡くなられた後に刊行された遺著のため、冒頭「はじ

めに」は伊藤先生ご自身が執筆されていますが、巻末「あとがき」は伊藤先生の奥様の伊藤（中馬）祥子先生が書かれています。さらに刊行にあたって、伊藤先生に学んだ清水真志、吉村信之氏の二名による「解説者による付記」と「解説」もあわせて所収されています。清水、吉村両先生の本書刊行における尽力は大きく、その点も申し添えておきます）。

- 第一章 価値概念の進化とその歴史的基礎
- 第二章 資本主義の螺旋的進化
- 第三章 サブプライム恐慌からユーロ危機へ
- 第四章 現代資本主義における貨幣・金融の政治経済学
- 第五章 格差再拡大の政治経済学
- 第六章 新自由主義的資本主義の再考
- 第七章 世界経済の構造変化と先進諸国の衰退
- 第八章 日本における住宅金融と金融不安定性
- 第九章 日本の人口動態の危機
- 第一〇章 日本資本主義の多重危機
- 第十一章 マルクスの経済理論による社会主義への展望
- 第十二章 二一世紀型の社会民主主義と社会主義の政治経済学

本書の構成から明確に読み取れるのは、伊藤先生の問題関心と考究領域がきわめて広範囲に及んでいることで

す。実際にその内容もきわめて体系的で専門的です。二〇年以上にわたって執筆し続けてきたひとつひとつの論考は、考察主題に対して常に複数の観点からの詳細な整理と論評をおこない、さらに多くの論考の最後では、新自由主義（的資本主義）からの転換や新自由主義をのりこえうる新たなオルタナティブの可能性についても同様に、多元的な視野から一貫して模索されています。内容上の重複をとめないながら、政治経済学的見地からみてきわめて重要な一連の問題群をめぐって、伊藤先生がこれほどまでに粘り強い思索と考究を精力的に重ね続けてこられたことに、評者の私は驚き、感銘を受けます。

本書『資本主義の多重危機』には、『資本論』と現代世界』にもみられるように、欧米マルクス派の学問的貢献を積極的に活かす、伊藤先生の鮮烈な時代認識と透徹した良識が貫き流れています。清水・吉村両先生が巻末「解説」で指摘されているように、伊藤先生の「本書は、いわばその最後の集大成ともいえるだろう」（二七六頁…以下においてとくに断りがない限り、引用は本書の頁数）ことにちがいません。

二〇世紀後半にかけて新自由主義化した資本主義の限界、ソ連型社会主義の崩壊という現代世界におけるいわゆる「双対的危機」⁴の深度は二一世紀においていっそう顕著に増しており、とりわけ前者における危機はまさに「多重危機（Multiple Crises）」⁵として、人類にきわめて重い宿題を課しています。現代「資本主義」世界が解決しえず直面し続けている「多重危機」の諸相とそれらを生じさせている根拠を学問的に解明できなければ、新自由主義的資本主義と二〇世紀型社会主義をのりこえうる「二一世紀型社会主義」をふくむオルタナティブを骨太に展望することもできません。そうした試みのなかには、新自由主義に理論的基礎を与えている主流派の新古典派ミクロ経済学の限界を浮き彫りにする作業も含まれているはずです。「新古典派経済学には、資本主義市場経済の歴史性やその限界を理解させる準備も基礎もないのではないか」（『サブプライムから世界恐慌へ』青土社、二〇〇九年、一〇五頁）⁶。こうして本書での伊藤先生の体系的考究は、人類の未解決問

題への挑戦の一環をなしているといってもけつして過言ではありません。⁽⁷⁾

なお本書に先立って刊行の既刊書『幻滅の資本主義』（大月書店、二〇〇六年）、『サブプライムから世界恐慌へ』（青土社、二〇〇九年）、『日本経済はなぜ衰退したのか』（平凡社新書、二〇一三年）、『マルクス経済学の方法と現代世界』（桜井書店、二〇一六年）、『入門 資本主義経済』（平凡社新書、二〇一八年）、『マルクスの思想と理論』（青土社、二〇二〇年）などはいっそう読みやすく、本書との併読が推奨されます。本書の構成をふまえ、伊藤先生の学問的考究の成果を五つの主要テーマから論じ直してみたいと思います。

一・資本主義の新自由主義化のインパクト

新自由主義的グローバル資本主義の限界とその歴史的意義を体系的に総括することは、人類史の未来を切り拓くうえできわめて重要です。そうした観点からみても、第二章「資本主義の螺旋的進化」は、本書全体の論旨を把握するために有益であり、また興味深い論考です。

マルクスとエンゲルスの共著『共産党宣言』（一八四八年）は、欧米マルクス派のデヴィッド・ハーヴェイが表明していたように、資本主義のグローバル化の胎動を予告していたともいえます。マルクスらのその天才的洞察とあわせ、アメリカを震源地とする二〇〇七―八年のサブプライム世界恐慌に象徴される、新自由主義化した先進資本主義諸国で生じた一連の事態は、まさに〈マルクスの逆襲〉と称してよいでしょう。

I・ウォーラーステインの表現でいうところの資本主義世界システムの歴史的進化を長期的趨勢から捉え直すと、一九世紀末の大不況（一八七三―九六年）以降、重化学工業の発達にともなう独占資本や労働者階級の結束をつうじた労働組合の急成長、一九一七年のロシア革命後のソ連型社会主義の建設、さらには帝国主義段

階における国民国家の役割も再強化され、資本主義世界システムは、自由主義段階における自由な競争の市場を制限すべく螺旋的・反転傾向を顕著に示していたのです。伊藤先生は、「現実にはほぼ一世紀にわたり……、資本主義世界システムの自由市場の活力は衰退しつつあるように思われた」（三五頁）と述べられています。

しかしながら、アメリカ、イギリス、そして日本といった先進資本主義諸国は、ケインズ主義的福祉国家路線にもとづく第二次大戦後の安定した高度成長の時代から一九七〇年代初頭のインフレ恐慌を介し、上記の趨勢をふたたび大きく反転させ、一九八〇年代以降、民営化（小さな政府）・緊縮財政・規制緩和の三面を主要な特徴とする新自由主義路線を政策基調とするようになりました。自由な競争の市場秩序のグローバルな再活性化をつうじて、資本主義は〈新自由主義化〉することになったのです。「自由な競争の市場に多様な社会的制御を試みていた資本主義の進化の態様を螺旋的に反転する歴史過程をなしていた」（四〇頁）という、資本主義の〈新自由主義化〉のもつインパクトが甚大なのはなぜでしょうか。

なぜならば、新自由主義的資本主義への転換をつうじて、新自由主義的資本主義は、たとえば以下のような危機と限界をはっきりと露呈してきているからです。すなわち、主流派の新古典派ミクロ経済学がその理論的論拠とされている新自由主義は、高度情報通信技術（ICT）をマルクスの唯物史観のいう経済的・下部構造としての物質的基盤としながら、グローバルな次元と規模で消費の個人主義的多様化や労働・金融市場の自由化を顕著に促進し、それと同時に、貨幣・金融の国際的な投機的流動化にともなうバブル・リレーと経済恐慌を「たらい回し」的に反復させ（第三章にあるハーヴェイの表現）、資本主義システムの不安定性も増長しています。地域社会は疲弊し、共同体社会は「個」へ分解されてきています。雇用形態も多様化・弾力化し、非正規雇用にもとづく非正規社会を大きく進展させ、多面的に格差を再拡大し、働く人々の生活・将来不安の持続化とそれと軌を一にする少子化もいっそう深化しています。さらにいえば、市場原理主義イデオロギーによる新

自由主義的資本主義は、グローバルな地球温暖化現象に象徴される、人間社会とその基盤をなす外的自然の荒廃化というエコロジカルな災厄と危機を解決する道筋を示していません。

かつての『資本主義の限界とオルタナティブ』（岩波書店、二〇一七年）という伊藤先生の書名が端的に示唆しているように、市場経済による資本主義には根源的矛盾や不可避的な不安定性、自己破壊性という「限界」が本来的に内在していますが、資本主義の〈新自由主義化〉こそはそうした「限界」をいっそう強く露呈し、それらの相互累進的な複合作用が現代的な「多重危機」を惹き起こしているのです。伊藤先生が本書『資本主義の多重危機』をつうじて果敢に挑まれている人類史的課題は、次のような凝縮的な一文に端を発するといえるでしょう。「こうしてわれわれは、前世紀末におけるケインズ主義ないし社会民主主義とソ連型社会主義への幻滅に加え、それに代わる期待を集めていた新自由主義にも失望を深め、世界史の進路に深刻な重層的な危機と閉塞感を経験しつつある」（四三頁）。まさにそうしたトリレンマから人類が脱却すべく、広く深い思索を伊藤先生は重ね続けておられたのです。

のちの第七章「世界経済の構造変化と先進諸国の衰退」においても簡潔な論及があるように、BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ）に代表される新興諸国やその他の途上国における、大規模な地殻変動をとまなう成長拠点のシフトの動向が注視されるのは対照的に、先進諸国において、経済成長の鈍化からの顕著で長期的な衰退傾向をもたらし続けている新自由主義的グローバル資本主義の限界はあきらかであるにもかかわらず、すでに四〇年以上、いや半世紀近くに及んで、それは経済政策の基本教義としてのしごとさと生命力を依然として保持し続けています。そのこと自体が新自由主義（的資本主義）に代替しうる新たなオルタナティブを見いだしにくい世界史的状况を生み出しているともいえますが、われわれはこの点をどうみればよいのでしょうか。

二・新古典派経済学の排他性と競合的学派

おそらくそのことは、自由な競争的市場原理こそが公正で合理的な経済秩序をもたらすとみなす新自由主義が、その物質的基盤であるICTと方法的個人主義にもとづく新古典派ミクロ経済学と適合的であること、さらには、さまざまな形態に変異しながら分析領域を拡張していく現代の新古典派ミクロ経済学が世界の大学や学界で支配的になり、マルクス『資本論』の経済学やケインズのマクロ経済学（ミクロ的基礎づけの新古典派のケインズ経済学ではない）などの政治経済学、それらをふくめて尊重する異端派経済学が過度に排除され、学問の多様性が大きく失われていることとも有機的かつ密接に関連しているはずだ。だからこそ伊藤先生は、第一章「価値概念の進化とその歴史的基礎」の最後で、こうした事態はまさに「現代世界の危機的ゆきづまりに経済学が学問的に応える可能性を大幅に狭める方向を選択していることになっていないであろうか」（二四頁）と深く憂慮されているのです。経済と社会の危機は、社会科学としての経済学の危機と連動しあう累積的な循環・再生産構造をなしているのです。

アメリカでのラディカル・エコノミクスの先導的理論家の一人であるD・コッツの論考を、第六章「新自由主義的資本主義の再考」として取り上げ検討を加えている伊藤先生の試みは、そうした事態への批判的認識を明確に表明するものでしょう。コッツが新自由主義的資本主義を分析する際に依拠している資本・賃労働の労使関係など社会的制度的諸要因を重要視する蓄積の社会的構造理論（Social Structure of Accumulation = SSA理論）は、フランスのレギュラシオン理論とあわせて、マルクスとケインズの経済学を分析の理論的参照枠のコアに位置づけているからです。ラバヴィツァスとの共著 *Political Economy of Money and Finance* とその邦訳版『貨幣と金融の政治経済学』（岩波書店、二〇〇二年）をあげ、マネタリーな経済理論としての強さ

をも体系的に有しているのがマルクスの経済学であることを伊藤先生が再確認し、マルクス派のラパヴィツァスとポスト・ケインズ派のディムスキーとのあいだの論争とその理論的意義・射程について考察している第四章「現代資本主義における貨幣・金融の政治経済学」も、第六章と同様の学問的関心に端を発する論考です。

とりわけ現代の主流派をなす新古典派経済学は概して市場経済を自然視し、その調和的で効率的な機能的特性（市場の失敗、歪みを理論体系のなかに組み込んであるもの）を信奉する傾向が強く、貨幣についての理解もきわめて狭く、それは「たんに財やサービスの交換を媒介する手段であり、市場における商品の流通手段であり、その意味での通貨としての役割にとどまる」（伊藤誠『サブプライムから世界恐慌へ』青土社、二〇〇九年、一〇〇頁）のです。このような単なる媒介である交換手段としての貨幣理解の論理的帰結は、諸商品の部分的不均衡が生じてても、それは市場の価格メカニズムによる需給調整機能をつうじて速やかに解消され、「商品の全般的過剰生産や労働者の不完全雇用をもたらす恐慌や不況はおこるはずはないと信じられることになる」（同上書、一〇二頁）のです。

マルクスの経済理論の重要な特徴のひとつは、新古典派体系と顕著に異なり、「市場経済の諸形態と資本主義市場経済との歴史性をこうしてはつきり区別していること」（七六頁）です。この着眼点は、資本主義へのオルタナティブとしての市場社会主義をふくむ社会主義の多様な理論的可能性を展望する際、そこでの貨幣・金融ないしは信用の諸機能のありかたが問われることになる以上、けっして看過できません。

いずれにせよ、マルクス派のなかにも多様な理論的潮流があることを明確に認めあい、非マルクス派の経済学との対峙、競合・協力関係についての論議が、新自由主義的グローバル資本主義とそれを基礎づけている新古典派経済学の排他性への体系的な批判的考察と有機的に呼応しながら、いっそう推進されてよいでしょう。実際にそれは、これからの（市場）社会主義の新たな可能性にも大きく関わってくるのです。

伊藤先生は市場社会主義の理論モデルの多様性を強調され、本書の四八頁の脚注でアナリティカル・マルクス派のジョン・ローマーに言及されています。『経済学からなにを学ぶか』（平凡社新書、二〇一五年）において、ローマーに先立つオスカー・ランゲの市場社会主義論を基礎づけている「新古典派ミクロ経済学の理論も、少なくとも一般均衡学派の伝統には、社会主義の理念と接合可能とみなされているところがある」とし、「それは経済学の思想と理論の関係の多様性ないし弾力性をめぐり、注目に値するところであろう」（同上書、一四七頁）と述べられています。社会主義の新たな可能性についての再考は、その理論的参照枠のあり方と密接不可分であることからみれば、「多様性ないし弾力性」という伊藤先生の上記の見解はより突き詰めて、なにを意味し含意しているのでしょうか。ランゲやローマーが依拠している新古典派の静学的な一般均衡理論とマルクスの経済理論から導かれる各々の社会主義モデルは大きく異なり、とくに前者のモデルに対しては、ハイエクラオーストリア学派の論者によってさまざまな理論的批判が提起され続けてきたのです。理解の仕方によっては、新古典派の一般均衡理論を基礎とする社会主義モデルをも概して容認する伊藤先生のスタンスは、社会主義の可能性をめぐる新古典派経済学のあり方について、画義的で折衷的ではないかとの批評がなされるかもしれません。さらに踏み込んだ検討を要する問題ではないかと思われまます。

社会科学としての経済学の現状や「経済学の歴史」そのものを広く深く問い直すことは、今なお主要な二一世紀的課題の一環をなしています。上記で引用しておいた、第一章の最後における伊藤先生の見解からも、それは本書の全体に通底し、根幹をなす基本認識であるのです。

三・金融化資本主義の脆弱性と格差再拡大

二〇〇九年に刊行の『サブプライムから世界恐慌へ』によれば、先進諸国における現代のアメリカを先進的モデルとする新自由主義的グローバル資本主義は、いわゆる多重証券化された各種金融商品の膨大な取引をこそ中心の業務とする、「金融化資本主義 (financialized capitalism)」と規定しうる顕著な特徴をも示すようになっていました。国内外の金融市場の規模が膨張し、金融諸機関の役割が肥大化するとどまらず、金融諸機関の収益源として、「金融市場における各種債務証券、株式、保険、外貨、デリバティブ (金融派生商品) などの取引手数料や取引差益が増大」しており、もはや「伝統的な銀行業務のように利子収入のみにもっぱら依存するものではなくなっている」(五四頁) からです。

伊藤先生をはじめ、マルクス派の理論家のコスタス・ラバヴィツァスやアンドルー・グリーン、デヴィッド・ハーヴェイらは、そうした「金融化資本主義」としての側面に大きな学問的関心を払っています。

第三章「サブプライム恐慌からユーロ危機へ」は、サブプライム恐慌からギリシャを震源とするヨーロッパでの国家債務危機 (ソブリン危機)——伊藤先生によれば、後者はサブプライム恐慌の進展的で後産的一環をなし、サブプライム恐慌から国家債務危機へのハーヴェイのいう「たらい回し」的なシフトが、彼のいう地理的不均等発展の様相を呈して深化しているのです——の諸相とそのダイナミズムを描き出し、金融化資本主義に内在する深刻な脆弱性をも浮き彫りにしている論考です。この論考は、ハーヴェイの恐慌論をとりあげ再検討を加えている、第一二章「二一世紀型の社会民主主義と社会主義の政治経済学」においての考察内容とも大きく関連するものです。第三章でとくに興味深いのは、伊藤先生によって次のような重要論点が強調し直されていることです。

というのは、膨大な数の低所得者層をなす労働者階級が背負わされるサブプライムローンによる長期におよぶ過酷な金銭的重荷は、労働力の債務危機となり、いわゆる労働力の商品化をつうじて、資本主義において剰余労働が生み出す剰余価値が資本・賃労働という資本主義的生産関係のもとで資本家に搾取される従来の収奪構造にとどまらず、概して低所得の労働者階級は、「労働力の対価としてうけとる賃金のかんりの部分を、一方で預金、年金基金、保険金などの形で金融機関に集められ、他方で住宅ローンなど消費者金融への元利払いやそれに付随する手数料、保険料などの形で重ねて搾取される経済関係のもとに組み込まれてきている」(五五頁)からです。伊藤先生は、金融化資本主義のもとでのそうした新展開を労働力の金融化と呼称されています。資本主義の経済的基礎をなす〈労働力の商品化〉に新たに加わる〈労働力の金融化〉という概念の意義とその理論的位置づけについてはさらに検討を要しますが、それらによる重層的な搾取・収奪構造の中長期的な持続化が、労働者大衆の生活基盤を毀損し、不安定性を大きく増長させていることはいうまでもありません。

伊藤先生はさらに問い続けます。サブプライム世界恐慌とそこから随伴的に誘発され拡大することになった国家債務危機への反省から、それらを推し進めた新自由主義的緊縮財政を反転し、ケインズ主義的社会民主主義的な諸政策を打ち出す動きが、とりわけ米日での政権交代をつうじて一時的には実現したものの、それは国家債務危機を深める懸念から新自由主義的緊縮政策へ「再反転」させられ、金融・通貨危機を媒介としながら、ハーヴェイのいう経済危機の「たらい回し」現象が定着している現代世界の状況をどう理解し、ハーヴェイ的に「何をなすべきか」なのかを。ここでは、伊藤先生自身の確固たる学問的認識のみを表明しておきましょう。「これを歴史の終わりとみなしてよいはずはない」(六五頁)。

一九八〇年代以降における資本主義の新自由主義化と上記でみてきた金融資本主義化とともに、本書の全体をつうじて一貫して重要視されているのが、とりわけ先進資本主義諸国における格差問題の再燃です。

伊藤先生は第五章「格差再拡大の政治経済学」で、フランス人経済学者のトマ・ピケティの世界的ベストセラー『21世紀の資本』（邦訳、みすず書房、二〇一四年）の衝撃的内容について、マルクス『資本論』の経済学との理論的対比をつうじて多面的に考察されています。周知のように日本でも本書はベストセラーとなり、大きな話題作となりました。ピケティの当該著書は大部ですが読みやすく、刊行から一〇年強しか経っていないにもかかわらず、すでに古典的名著の一冊としての風格すらあります。本書の刊行後もピケティの本は邦訳され続けており、たとえば二〇二三年の邦訳『資本とイデオロギー』は一〇〇〇頁をこえる分量の大著です。

それゆえ当該章については、ぜひピケティの『21世紀の資本』とあわせて読み進めていただくのが良いであろうと判断し、以下では示唆に富む二つの論点についてのみ論究してみたいと思います。ひとつは、『21世紀の資本』の理論的分析の基礎に据え置かれているのが、マルクスの経済理論ではなく、新古典派経済学の理論体系であることに関わっています。現代の資本主義世界に拡がっている富と所得の顕著な不平等化、格差再拡大の進展という、政治経済学の古典派的伝統につらなる重要な問題群を再燃させたピケティの貢献はいうまでもなくきわめて大きく、経済学のいかなる競争的学派においても尊重されなければなりません。

かつてサイモン・クズネッツが提唱していた、いわゆるベル・カーブ論に対し、「20世紀の例外的で劇的な資産と所得の格差縮小は、20世紀末から21世紀に向けて資産と所得の格差にU字カーブ再拡大をもたらしつつ」（八九頁）あり、とりわけピケティが注視しているのは、資本所有が上位トップ一〇%、さらには一%の富裕者層に集中していく傾向です。たとえばアメリカにおいては、トップ一〇%がじつに七〇%の資本所有を支配するという著しく不平等な分配構造を示してきています。それにとまなう中間層の没落が生じているのはいうまでもありません。

ピケティによれば、資本収益率（ r ）が経済成長率（ g ）より高くなること（ $r > g$ ）が、上記で述べられ

たような格差再拡大の実証的根拠としてあげられています。マルクスが労働価値説を古典派から批判的に継承し、それこそを資本の収益の社会的基礎（賃金労働者の剰余労働が資本の取得する剰余価値の源泉をなしていること）をあきらかにする理論的論拠としていたのとは異なり、新古典派経済学に依拠するピケティの一連の分析はそれが必然的に等閑視されています。「資本」そのものの規定自体もまた、新古典派経済学に内在する通弊としての物神的資本観を自然視することから免れておらず、ピケティの一連の格差再拡大論が、資本蓄積の動態とそれにもなう資本の自己矛盾についての議論を欠いているのも、恐慌論がない新古典派経済学に依拠することの論理的帰結です。総じて伊藤先生は、ピケティのいう「 $r > g$ 」が成り立つのは、一般的にはどのような諸条件を要するか」（九三頁）という論点への理論的な再検討を深め、新自由主義的資本主義と金融化資本主義に内在する限界への批判的分析のなかで、ピケティの議論を位置づけ直すことの必要性を説かれています。

もうひとつは、ピケティが再燃させた格差再拡大という現代世界が直面している難題に対するオルタナティブに関わっています。この論点についてのピケティと伊藤先生の見解との決定的相違の根源にあるのも、上記と同様に、いかなる理論的参照枠を据え置いて格差再拡大を是正していくのか、または正すべきであるのかということにほかなりません。

伊藤先生においては、「ピケティの提唱する累進的な相続税や所得税の再強化とあわせての、国際資本課税もその有力な一環に位置づけることができる」（一〇三頁）とみなされながら、格差再拡大の是正をふくむオルタナティブ社会の実現への方途はそれらに狭く限定されうるものではないと主張されています。マルクスの思想と理論を活かしうる、また十分に活かすべきであるという立場からの伊藤先生の結論はここでも確固たるものであり、本節の最後に銘記しておきましょう。「ピケティの提示している格差再拡大傾向への徹底した解

決は、持続可能な自然環境の保全ともあわせて、やはり究極的には私的資本の無限蓄積の原理から解放される社会主義の課題とみなさなければならぬのではないか」（二〇五頁）。

四・日本資本主義をめぐる多重危機の特質

日本経済と日本資本主義のいわゆる「失われた三〇年」のダイナミズムをめぐる一連の問題群もまた、伊藤先生にとって重要な学問的意義を担い続けています。第八章から第一〇章はそのための考究であり、たとえば第二章と第七章、第一〇章の三つの章をセットで通読すれば、「資本主義」、「世界経済」そして「日本経済・日本資本主義」が直面し続けている〈多重危機〉のコンパクトで有機的な全体像が得られることでしょう。

第一〇章「日本資本主義の多重危機」は、ひとときわ精彩に富む思索が展開されていると思います。本書の骨子を知りたい方は、ここから読み進めてもよいと強く推奨できるほど、伊藤先生の筆致は明快です。

新自由主義化した先進諸国におけるまさに長期的な衰退と停滞の典型的事例をなしており、いわばその先端的モデルとしての諸特徴を顕著に示しているのが日本資本主義にはかならないというのが、伊藤先生の基本認識です。したがってそれは、日本において新自由主義的資本主義の形態がまったく展開されていないとみならず、第六章で批判的に扱われているD・コッツの日本例外論（二一六―二一八頁）と対照的であることはいまでもありません。当該第一〇章では、1）日本資本主義の成長の衰退、2）貨幣・金融の不安定性、3）富と所得の格差再拡大、4）少子高齢化の進展と人口動態の危機、5）財政危機の深化、そして6）産業空洞化をともしなうグローバル化の六つが、あらためて「日本資本主義の多重危機」を象徴する重要な側面として強調されています。くわえて二〇一一年の東日本大震災と過酷な原発事故、二〇二〇年以降の新型コロナウイルス

のパンデミック、グローバルな地球温暖化現象などの三つに類型化された、自然災害を動因とする経済危機の重層的な深まりについても広く考察されています。

ただけっして見逃してはならないのは、そうした「日本資本主義の多重危機」の基本をなすものこそが、マルクス『資本論』から宇野弘蔵がかつて強調していた論拠をふまえ、まさに資本主義そのものの基本前提でもあるところの労働力商品化の無理の現代的な深化と存続にあるとみなす認識にほかなりません。この論点を、伊藤先生は本章の全体をつうじて何度も何度も強調されています。そこから直截的に導きうるのは、二一世紀型社会民主主義というステップをつうじての二一世紀型社会主義の新たな潜勢力の「その基本的意義は、労働力の商品化の無理の現代的深化の緩和からより根本的脱却にむかうことにある」（二一八頁）ということです。これは第五章のピケティ論での結論的主張とも符合しています。

第八章「日本における住宅金融と金融不安定性」においては、周知のように、一九八〇年代後半から日本で生じた、株価と土地・住宅などの不動産価格の投機的上昇によるバブル経済の形成とその劇的な崩壊過程の一連の特徴的様相が詳細に活写されています。低成長下での住宅金融の弾力的拡張を介しながら、地価のバブル的上昇とそれにもなう住宅価格の高騰そのものによって、実際には、「人びとの努力や勤勉さとは無関係な不公平で不平等な富の再分配が、土地や住宅の所有者、売り手、買い手、非所有者などの間に大規模に生じていたとみななければならない」（二六一頁）のです。投機的バブルで膨れ上がった「株価と地価との双方のバブル崩壊により、一九九〇年代半ばまでにほぼ一〇〇兆円の資産価額がメルトダウンしたと見積もられていた」（二六三頁）とも指摘されています。

かつてE・ヴォーゲルの著書によって、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」として世界から高く称賛されていた日本経済は、一九九〇年のバブル崩壊を契機にその後の「失われた三〇年」という長期衰退過程に突入し

ていくことになり、その重苦しく先行き不透明な混迷ふりと閉塞感とを、当該論考はわれわれに強く突きつけています。バブル崩壊後の日本経済と日本資本主義が辿った「失われた三〇年」をつうじて、いったいわれわれはなにを「失った」のかを総括し直す必要性も実感できるでしょう。

もちろんそれらの学問的背景にあるのは、日本における巨大なバブル経済の形成とその大規模な崩壊こそは、「新自由主義による市場原理への楽観的信頼の失敗を実証するものとなっている」（一六四頁）という伊藤先生の基本認識であり、それはまた、貨幣・金融の根源的不安定性をその特徴として内在している資本主義市場経済の自己破壊性が、社会的制御を解放して競争的市場原理を絶対視する新自由主義によって、いっそう顕著に増長されたことの論理的帰結にはかならないということなのです。バブル崩壊後の金融諸機関に巨額の公的資金を投入して救済する論理はあきらかに新自由主義的政策基調に反し、新自由主義はそれが掲げる理念と現実とのあいだに大きな乖離と矛盾を生じさせています。第三章の主題に立ち戻っていえば、アメリカ発のサブプライム恐慌から国家債務危機への深化が進展していくなかで、富裕層をなす資本家階級には優遇的措置がとられる半面、「住まいを差し押さえられたり、失職したりして経済危機に苦しむ労働者たちへの公的支援はあまりに薄い」（六一頁）のです。

日本資本主義の多重危機を特徴づけている先述の4）については、第九章「日本の人口動態の危機」において、より詳細で本格的な議論がなされています。伊藤先生によれば、「歴史的な社会構成のあらゆる形態をつうじ、世代間の人口の再生産を維持することは、経済生活の原則をなしていたにちがいない」（一七一頁）とされ、とりわけ日本において急速に進展している少子化の持続化こそは、まさに経済原則の基盤そのものを毀損する重大な問題を露呈しているのです。女性一人が生涯に産む子供の平均数をあらわすTFR（Total Fertility Rate、合計特殊出生率）は、一九七三年の二・一四から二〇〇五年には一・二六へと顕著に低落し

てきています。それでは、本章の副題「マルクスの資本主義的人口法則の観点から」に照らし、日本の人口問題の動態とその危機はどのように理解できるのでしょうか。

いうまでもなく資本主義における人口問題は、マルサスの自然法則の帰結としてではなく、マルクスのいう資本主義の生産様式とそのもとの資本蓄積のダイナミズムを明確に射程におさめるところの歴史的社会的諸関連のなかで生じる現象として捉えなければなりません。このことの学問的含みはじつは大きな意義をもっています。日本をふくむ先進諸国における「人口動態の危機」が、マルクスが批判したように、マルサスのいう自然法則の帰結ではないならば、過度の少子化ベシミズムは克服することが可能な現代的課題とみなすことができるからです。

もう少し踏み込めば、『資本論』での体系的考察にもとづくマルクスの資本主義的人口法則論は、「資本主義経済が他の商品生産物と異なり、人間の労働力を生産もしえず、資本の蓄積過程での需要の変動に供給を適合させることもできないまま、労働力を商品として利用するところにひそむ根本的矛盾のあらわれ」（一八九頁）であることをあきらかにするものであったのです。すでにこれまでの論述で幾度も指摘してきたように、現代の新自由主義的グローバル資本主義は主流派の新古典派ミクロ経済学を理論的論拠として、さらにICTを強固な物質的基盤としてそれを広範囲に及んで弾力的に活用しながら、安価な女性労働者の大量動員をふくむ非正規雇用の割合をも大きく拡大させ、結果的には、共同体的人間関係を個人主義的に解体する傾向を推し進めることに過度に成功していたのであり、したがってむしろその成功こそが、かつて宇野弘藏が強調していた労働力商品化の無理という資本主義の基本矛盾の現代的様相をとめない、「日本においても少子高齢化と人口減少の形で、予期されなかったような人口動態の危機が生じ、それが日本資本主義の深刻な衰退化の重要な要因になっている」（一九二頁）ということなのです。

伊藤先生のこうした理論的・現状分析的な総括は、きわめて示唆に富んでいると思います。シュンペーターの資本主義衰退論とは異なる歴史的社会的コンテクストと洞察でありながら、日本をふくむ新自由主義的資本主義のまさに「過度な成功ゆえの衰退」という伊藤先生の見識は、新自由主義の生命力と適合力の双方を逆説的に照射するものであり、資本主義へのオルタナティブを探究する際にも留意されるべきでしょう。

資本主義市場経済を予定調和的な自然的自由の秩序とみなす新古典派経済学の理論体系とそれを理論的論拠とする新自由主義では、先進資本主義諸国での人口動態の危機を惹き起こしている根拠を学問的に明確にしえず、結局のところ、その打開策の方途すら見いだしえないのではないかというのが、当該第九章と本書の全体をつらぬくコア・メッセージのひとつにちがいません。そのことは同時に、「資本主義の多重危機」のまさに多面的考究におけるマルクスの経済理論の潜勢力をこそあらためて見いだすことの意義をも表明しているのです。

五. 二一世紀型社会主義への展望にむけて^①

二〇〇九年から二〇一二年に社会評論社から刊行された、『伊藤誠著作集』全六巻の第六巻目の表題は『市場経済と社会主義』です。そこには同じ書名の『市場経済と社会主義』（平凡社、一九九五年）と『現代の社会主義』（講談社学術文庫、一九九二年）の二冊が所収されています。

ソ連崩壊の一九九〇年代初頭以降、二〇世紀型社会主義の失敗とその世界的意義を体系的に総括していく作業は、人類史における雄大な社会主義の理念と思想の新たな可能性とあわせて、伊藤先生のなかでもっとも重要な政治経済学的課題のひとつをなしていたと思います。さらにそれは、新たなミレニアム以降、新自由主

義的資本主義とその理論的論拠とされている新古典派ミクロ経済学の限界が顕著になることと軌を一にして、いっそう焦点化されることとなりました。「社会主義」ないしは「市場経済と社会主義」という、巨大かつ壮大なテーマを主題とする単著を二一世紀に世に問うことは、伊藤先生の大きな学問的目標の一環にあったのではないかと推察されますが、それは「未完」となりました。欧米のマルクス理論家や日本の斎藤幸平など、エコロジカル社会主義を積極的に提唱する新たな活力に伊藤先生は大きな期待を寄せられていました。

以下では、紙幅の都合上、二つの主要論点のみに着眼しておきます。

一) 資本主義への多元的オルタナティブ

当該テーマに対する伊藤先生なりの考究は、とりわけ本書の最後の二つの章、第一章「マルクスの経済理論による社会主義への展望」、第二章「二一世紀型社会民主主義と社会主義の政治経済学」で、いわば独立した論考としてとりまとめられています。

しかしながら、本稿の冒頭ですでに言及しておいたように、本書の全一二章のうち、上記の二つの章を除く約半分の論考の最後で、二一世紀型社会主義の新たな可能性をふくむ、オルタナティブ未来社会の諸相についての多面的考察がなされています。第二章「4 その諸問題と変化の可能性」、第三章「4 どうしてこうなるのか、何をなすべきか」、第五章「3 格差再拡大へのオルタナティブ」、第六章「4 これからの社会経済の選択肢」、第九章「4 人口動態の危機と新自由主義の限界」、第一〇章「3 新自由主義からの転換」、のうちに。各章の論考を読者が各自で読み進めながら、伊藤先生が「二一世紀型社会主義」のめざしていくものの諸特徴をどのように展望されているのを確認していただきたいと思います。それらを共通して貫いているのは、働く人々の経済民主主義をいかに充足し、徹底的に実現していけるのかという冷静にして熱いまなざしで

す。

二〇世紀のソ連型社会主義の実験をあらためてどう捉え直せばよいでしょうか。ソ連型社会主義（集権的計画経済）が実現しえた経済的・歴史的諸成果（二三二―二三三頁）を正しく評価し位置づけなければなりません。周知のように、ソ連型社会は、その末期に生じた天然資源と労働の供給余力の枯渇、不足経済の慢性的な常態化、既存の経済モデルを質的かつ弾力的にチェンジしていくイノベーションの大幅な停滞と困難に直面し、そして民衆の自由を抑圧する非民主的な政治体制と特権的な党と官僚層肥大化への不満も蓄積させながら顕著に摩滅していき、最終的に破綻に至りました。このことが世界史における重大な悲劇であったことはいうまでもありませんが、伊藤先生によれば、「それにともない資本主義をこえる社会主義の可能性がすべて失われたとみる見解も性急で狭すぎる」（二〇四頁）のです。新自由主義的資本主義の危機と限界は明白だが、実際のところ、それらは本当に資本主義をこえる社会主義オルタナティブでなければ克服しえないものであるのかについては、マルクス派と非マルクス派では意見が分かれ、賛否両論を交えた多様な主張が存在しうでしょう。一言でいえば、いわゆる〈資本主義終焉論〉をどうみるのかということです。

とはいえ、上記の伊藤先生の学問的立場を尊重する際、押えておかねばならないきわめて重要な焦点のひとつは、二一世紀における「社会主義への道はひとつにかぎられない」（二一九頁）という認識にほかならず、そのことをマルクス『資本論』体系をつうじて明確に読み取ることの現代的意義、そしてその含意の未来への活かし方です。

マルクス自身は彼に先立つ空想的社会主義と異なり、社会主義の未来の青写真を詳細に描き出すことにはむしろ禁欲的であり、スミスとリカードの古典派経済学が発見できなかった〈剰余価値〉と経済学の理論体系の裏付けを有する科学的史観としての〈唯物史観〉——伊藤先生によれば、「唯物史観は、階級諸社会の歴史とし

ての資本主義にいたる人類前史を克服する社会主義的展望を含蓄する、人類史の包括的史観をなしている」(二二頁)——とによって、社会主義に科学的基礎を提供することにこそ専心していたのです。その意味でもマルクスとエンゲルスは、科学的社会主義者であつたわけです。商品、貨幣、資本という市場経済の(流通)諸形態と資本主義市場経済の特殊歴史性とを明確に区分していることはマルクス『資本論』の経済学の顕著な特徴をなし、第一章「価値概念の進化とその歴史的基礎」をつうじた、とりわけ価値形態論をめぐるアリストテレス、マルクスそして宇野弘蔵の鼎談をふまえて強調されている内容をあらためて敷衍すれば、マルクスによる『資本論』の経済学は、資本主義市場経済を自然的で合理的な自由の秩序とみなす古典派経済学や新古典派経済学の価格理論とは異なり、市場経済とそれにもとづく資本主義経済の特殊な歴史性を体系的に価値概念から理論的に解明していく課題を追究している」(二二頁)のです。「社会主義への道はひとつにかぎられない」という先の伊藤先生の見解についていえるでしょうか。

市場経済の流通諸形態をなす商品、貨幣、資本が、価値の実体としての社会的労働の再生産過程に対して外来的な歴史性を有するというマルクスの理論的・歴史的洞察をなすところの市場経済外生説(なおこの表現は伊藤先生の『市場経済と社会主義』平凡社、一九九五年、第一章に拠っています。これとは対照的なスミスの見方は市場経済内生説と呼称されています)に立つならば、市場経済とそれを機能的に構成する貨幣などを全面的に廃棄する集権的計画経済こそを社会主義の唯一普遍とみなす必要はなくなるのであつて、これまでのラングからブルスにつらなる東欧改革派の市場社会主義やその第五世代モデルであるのみならず主張するジョン・ローマーら現代の市場社会主義論、さらには現在の中国における社会主義市場経済の実験の可能性なども念頭に、社会主義の理念と市場経済の諸機能を弾力的に結合する市場社会主義ないしは社会主義市場経済もまた、存立可能な多様な社会主義経済モデルの一形態として理解することができるのです。かつての伊藤先生に

よる『マルクスの思想と理論』（青土社、二〇二〇年）での表現を引用しておけば、マルクス『資本論』の体系構成は、資本主義と市場経済との理論的分離可能性と、それにもとづく市場社会主義の理論的可能性にも重要な論拠を示唆しているといえよう」（同上書、一八五—一八六頁）ということです。労働時間を生産と分配の基礎とする単純で透明な社会関係としてのマルクスのいう「自由な個人のアソシエーション」は、マルクスによって「それは本当に社会主義の唯一の経済モデルとみなされていたのかどうか」（二三五頁）と伊藤先生が問い直されているのはいっそう興味深く、示唆に富んでいるのではないかと思われます。

（二）社会主義の理論的基礎をどうみるか

いうまでもなく上記で扱われた内容は、社会主義の理論的基礎をどうみるかという、もう一つの論点と密接に関連しています。第一章は、未解決ともいえるそうした論点に立ち入って考察を及ぼしています。

伝統的マルクス主義の見地にたてば、社会主義社会は資本主義的経済システムをいわば反転させることで実現し、資本主義を支配する価値法則は廃棄され、生産諸手段の私的所有制も国有化され、それにともなつて集権的計画経済モデルが社会主義の典型的な経済秩序となるのです。実際のところ、ソ連型社会主義はそうみなされてきたのです。伊藤先生は、宇野弘蔵による最終講義の論考「利子論」（一九六八年）をとりあげ、「宇野は、社会主義経済を建設するには、資本主義市場経済をたんに廃棄するだけでは十分ではないことを示唆していた」（二二四頁）と指摘されています。資本主義経済において、遊休資金をまさに遊ばせておかぬような利子や信用機構のしくみを社会主義的にどう整備しうるのかという宇野の問題提起を真剣に受け止めると同時に、マルクスの経済理論が社会主義論としていかに活かしうるのかという挑戦的課題に取り組まれているのです。

社会主義経済計算論争は、社会主義のいわば（理論的基礎）をめぐって競合的学派のあいだで争われた有名な論争で、とくに一九八〇年代以降、ソ連型社会主義の危機と停滞が深まるなかで国際的に大きく再燃することとなりました。社会主義存立不可能論を主張するミーゼスやハイエク、ドン・ラヴォアア現代オーストリア学派、それに異議を唱え社会主義の存立可能性を支持し、そのための社会主義存立可能モデルを展開するランゲやラーナー、現代のジョン・ローマーら一般均衡理論（ローザンヌ）学派の二学派が主要な理論的対抗関係を形成しているなか、伊藤先生が当該論争に参戦し強調されていたのが、次のような批判的総括でした。

すなわち社会主義経済計算論争は、マルクス派、新古典派、そして新リカード派による価値論・転形問題論争、さらにそれらをつうじて問い直されることになったマルクス労働価値説の意義と妥当性と有機的に結合されていなかったというのです。伊藤先生によれば、前者がオーストリア学派とローザンヌ学派という新古典派内部での論争と解釈され、マルクス派のM・ドップやP・スウィーजीも、ランゲらの一般均衡理論にもとづく分権的な市場社会主義的解決をミーゼスとハイエクへの有効な反論とみなしたこともあり、マルクスの経済理論は社会主義経済計算論争における理論的参照枠として明確に論議されることはなかったわけです。

このような伊藤先生の見解の背景にあるのが、実際のソ連型社会において価格形態や貨幣形態は排除されえず、ループルという名の社会主義的疑似貨幣による社会主義的疑似価格（公定価格）が経済システムの再生産と経済成長を曲がりなりにも保障していたということです。伊藤先生によれば、それは、一般均衡理論が導く市場での限界的な需給変動によって決定される価格体系でも、マルクスの労働価値説が帰結する労働時間に基礎づけられる価格体系でもなく、客観的な投入産出の技術的物量体系から再生産可能な価格体系を導出する、新リカード派のスラッフア理論こそが最も近似性が高かったと結論づけられています。そして次のように述べられています。「証拠もないままあえていえば、スラッフアの価格理論もソ連型社会の経済的再生産の実践に

その構想のひとつの現実的基礎をおいていたのではなからうか。さらに続けて、「社会主義経済計算論争は、不幸にしてマルクスの労働価値説と分離されただけでなく、スラッファの価格理論もまだ利用しえないまま進行していた」(二二九頁)のだと。

上記でみた宇野の論考「利子論」での見解に立ち戻って言うならば、社会主義経済にはそれを学問的に正確に基礎づける経済理論こそが必要不可欠であり、社会主義経済の合理的な基礎づけをどのような経済理論の参照枠をつうじて問い直すのかをふくめた一連の重要な問題群が、依然として未解決のまま残されているということにはかならないのです。こうした学問状況を、社会主義をめぐる「宇野―伊藤問題」とあえて称してよいかもしれません。¹²⁾第一章「価値概念の進化とその歴史的基礎」と第一章「マルクスの経済理論による社会主義への展望」の各論考は、異なる主題をこそ論じていながらも、じつは根源的には深部で有機的に繋がっているのではないでしょうか。

二〇世紀型社会主義の象徴であったソ連型モデルの失敗の体系的総括とともに、伊藤先生が学問的に大きな貢献をなされてきた、資本主義経済の基礎理論としてのマルクス価値論・恐慌論の研究が、二一世紀型社会主義を展望しそれを理論的に基礎づけるものとしてどう活かしうるか、人類史的に巨大な未解決の難問が立ち現れているのです。

結びにかえて――学問的に未知の新大陸発見

遺著である『資本論』と現代世界』の副題には、「マルクス理論家の追憶から」という文言が付されています。欧米でのいわゆるマルクス・ルネッサンスがとりわけ一九七〇年代以降に大きく胎動していくなか、マルクス・宇野理論の日本人経済学者として主導的な役割を担われたのが、ほかならぬ伊藤先生でした。上記の著

書の「5 マルクス・ルネッサンス¹³⁾への冒頭にあるように、一九七四年から初めてのイギリス (ISE、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス) とアメリカ (ハーバード大学) の各大学での在学研究を称して伊藤先生は、「それは私にとって、学問的に未知の新大陸発見のように感じられた」(九二頁) と記されています。

そこから五〇年という半世紀後の二〇二四年に刊行された遺著『資本主義の多重危機』を読み進め、そして書評を書きながら、そのきわめて印象深い一文が常に私の念頭にはあったのです(なお余談になりますが、一九七四年に生まれ、二〇二四年に五〇歳をむかえた評者である私は、まさに伊藤先生の初の在外研究と当該遺著の刊行と偶然にもシンクロナイズしているのです)。さきの「学問的に未知の新大陸」とはたんなる物理的な場所にとどまらず、伊藤先生みずからの知的関心と知的好奇心を促し醸成していくところのまさに「学問的に未解決の問題群」を指し示しているのではないかと思われたからです。そのための思索と考究を体系的に重ね続けてこられた学問上の〈精神〉は、伊藤先生が遺してくれた鮮烈な〈追憶〉とともにこれからも輝きを増していくにちがいありません。

補記・伊藤誠先生との思い出

これまでの私は、伊藤誠先生のご著書の多くに書評させていただく機会に恵まれました。その初めての書評は、二〇〇六年に大月書店から刊行された『幻滅の資本主義』に対するもので、伊藤先生から直接の依頼を受けて執筆いたしました。二〇〇七年に『政経研究』という学術誌に掲載されたその原稿は、結果的に二万字をこえる書評論文となりました。今回の書評の分量もそれに近くなったこともあり、伊藤先生の本への初めての書評のことが無意識のなか、私の頭のどこかにあったのかもしれない。

本稿の冒頭で述べておいたように、遺著『資本主義の多重危機』の書評は、伊藤先生へのあらためての「追悼」文でもあり、真正正銘、「最後の書評」となることでしょう。そこで、私自身の記憶のなかに深く刻み込まれている伊藤先生との個人的な思い出の幾つかを補記として述べることで、本稿の締めくくりとさせていただきます。⁽¹⁴⁾

私が伊藤誠先生と初めてお会いしたのは一九九六年四月、先生が慶應義塾大学に非常勤講師として来られたときでした。東京大学を定年退官される一年前のことです。「社会主義経済論」という講義で伊藤先生は、ご自身の『現代の社会主義』（講談社学術文庫、一九九二年）を片手に黒板一面に板書しながら熱心に講義されていました。一九九五年に刊行された『市場経済と社会主義』（平凡社）も参考文献に指定されていました。慶應で「社会主義経済論」という当該科目は講義の適任者がおらず、じつは数年間、非開講になっていました。大学院進学を決意していた私は、こうして幸運にも伊藤先生の授業を拝聴することが叶ったのです。

卒業論文として書き、学部の懸賞論文に入選した作品が掲載された『三田商学研究』を授業後に手渡すと、翌週には「塚本君の論文、読みましたよ」といわれ、ランチをご一緒しながら、丁寧なコメントをいただきました。東大大学院から日本学術振興会の特別研究員として、伊藤先生がおられる國學院大學での受入指導教授をお願いした際には、快諾されると同時に、伊藤先生から温かくも厳しい助言を頂戴したことを覚えています。一研究者としてやっていくための明確な「覚悟」をした瞬間でした。

國學院大學での伊藤先生の演習系ゼミ後、伊藤研究室でちょっとした雑談とお茶をする機会が定期的にありました。研究室に行くと、ソファの前の長い机のうえに、仕上がったばかりの伊藤先生の論文のコピーが積んでありました。伊藤先生は、「塚本君、一部持っていきますか」といわれましたが、こうした機会はその後何度もあったと思います。執筆予定の論文スケジュールのメモのようなものが壁に貼ってあり、書き終える

と、チェックの斜線ないし◎印がされていました。伊藤先生ほどの研究者になると献本される本の冊数もかなりあるでしょう、知らないうちに本棚が新刊で埋まっていくな様子を垣間見ることもできました。師から学ぶことの醍醐味は、こうしたいわば無数の暗黙知にあるのかもしれない。

なお個人的な思い出はありませんが、次のようなことも私には記憶に新しいところです。伊藤先生の七〇歳古希を祝しての論文集の企画が発案され、私も一文を寄稿しました。『マルクス理論研究』（御茶ノ水書房、二〇〇七年）と題する、多くの伊藤弟子の論文からなる著書の刊行後、その出版記念の催しが二〇〇七年、東京大学内の会館で実施されました。参加者全員がマイクで一言ずつお祝いのスピーチをするのです。食事と歓談をしながら皆のスピーチがすべて終わると、伊藤先生がお話をされました。正確にすべてを記憶してはいませんが、こう言われたことは覚えています。伊藤先生曰く、『幻滅の資本主義』大月書店、二〇〇六年と『資本論』を読む』講談社学術文庫、二〇〇六年という二冊の著書を刊行した直後なので、今の自分は空っぽの状態だけど、これらを刊行して再検討してみたい理論問題にも少しずつ頭が向いてきています。そのひとつがいわゆる不等価交換の問題です。早く着手して、論文としてとりまとめたと思っています」。そして早くも伊藤先生は、二〇〇八年三月に「グローバリゼーションの時代における国際的不等価交換の意義」と題する論文を、その当時の勤務先である国士館大学の学術誌に公刊されたのです。それは、二〇一〇年の『伊藤誠著作集』第一巻の『現代のマルクス経済学』補論Ⅲ、伊藤先生における初期代表作 Value and Crisis の第二版の邦訳版で遺著ともなった『価値と恐慌』（岩波書店、二〇二四年九月）第五章、としても所収されています。

このような言動からもあきらかなように、伊藤先生はいつでも自分のなかに芽生えた新たな学問的テーマを大切にし、それに挑み続けてこられたのです。ひとつの山を越えてはまた次の山をめざし、学問という名の道をどこまでも歩み続ける純真なる探究者であったと思われる。けっして尽きることのなかった気高い学問精

神。そのことはやはり、巨大な山脈をなすマルクス『資本論』体系に多大な敬意を払い、惹かれ続けてきたことの必然的な帰結なのではないでしょうか。論文を書き続け、それを単著にまとめ刊行し続けることは、伊藤先生にとってまさに「たのしからずや」と実感させる、至福の時間であつたにちがひありません。本当に素晴らしいことです。心の底から私はそう思います。

愛知大学への赴任前には、社会評論社から刊行の『伊藤誠著作集』全六巻の編集・校正作業に協力させていただき、そのうちの二つの巻で私の名前を記してくださったこともけつして忘れられない印象的なエピソードです。二〇一八年の『入門 資本主義経済』刊行後、「週刊読書人」紙での最初で最後の伊藤先生との「対談」、本務校である愛知大学での特別講義も実現しました。八〇歳をこえてもお元氣な伊藤先生の講義を、私は本務校で拝聴することができたのです。ただ、二〇一八年一月に実施されたその特別講義が、伊藤先生と直接お会いできた最後の日となりました。

そうしたひとつひとつの光景や会話が今でもまばゆく、懐かしく感じられるのは尊く、本当に幸せなことだと思います。この書評原稿を執筆していくなかで、これまでに書評する機会を得た作品をふくめ、伊藤先生のご著書の多くを部分的ながらもあらためて読み直すこともできました。『資本論』によるマルクスの経済学の研究を一生涯かけて究め続けようとした伊藤先生の研究者としての姿そのものが想い起こされ、おのずと胸が熱くなります。伊藤誠先生との思い出は尽きません。これからも偉大な師から真摯に学び続けていきたい、私は今そう強く誓っています。

注

- (1) 塚本恭章「書評…マルクス理論家の〈追憶〉を引き継ぐために——経済学の〈危機〉と〈再生〉を問い直す」『週刊読書人』二〇二四年一月二六日、第三五二四号四面。
- (2) 塚本恭章「伊藤誠『資本論』と現代世界」を読む——マルクス理論家の〈追憶〉に思いを馳せて——「科学的社会主義」二〇二四年五月、第三二二二号、四六—五六頁。
- (3) 塚本恭章「追悼『伊藤誠先生を偲ぶ ライフワークとしてのマルクス経済学研究』」『週刊読書人』二〇二三年四月二一日号、第三四八六号八面。
- (4) 伊藤先生による当該表現については、たとえば伊藤誠『マルクス経済学の方法と現代世界』桜井書店、二〇一六年、「はじめに」四頁、『資本主義の限界とオルタナティブ』岩波書店、二〇一七年、「序章 資本主義の限界とオルタナティブ」八頁。
- (5) なおこの概念と類似したものとして「複合危機 (polycrisis)」があります。中野剛志『政策の哲学』（集英社、二〇二五年）の「結論」には、次のような解説が記述されています。「複合危機」という概念は、フランスの哲学者エドガール・モランが一九九〇年代に最初に使ったとされており、危機の前に「複合」と付されているのは、現代社会が直面している危機がいわば同時多発的に生じていることだけにとどらないからです。「過去三十年間のグローバル化によって世界が密接に連結したために、一つの危機が生まれると、それが連鎖的に世界中に波及するようになっていく。しかも、危機の原因の一つに絞ることはできない。こうした多中心性と複雑系によって特徴づけられる危機を指して『複合危機』と言うのである」。さらに、歴史学者であるアダム・トウズが明確に論じているように、「複合危機の恐ろしさは、危機の相互作用によって、個々の危機を足し合わせたものをはるかに凌駕する全体的な危機となるところにある」（同上書、いずれも三三二頁）。中野氏がこうして解説している「複合危機」は、本書で伊藤先生が強調されている「多重危機 (multiple crises)」ときわめて親近性をもつ概念であると考えられます。
- (6) 新古典派経済学に対するこうした伊藤先生の批判的見解についてのより詳しい概説については、伊藤誠「経済学からなにを学ぶか——その500年の歩み」平凡社新書、二〇一五年、第V章「新古典派経済学の方法論的個人主義」、とくにその四にある「新古典派経済学の危機と限界」が大変有益です。
- (7) 伊藤誠先生の東京大学時代における同僚であった宇沢弘文先生（一九二八—二〇一四）について、宇沢評伝を執筆した佐々木実氏が次のように書いているのはひととき印象的ではないでしょうか。というのは、宇沢先生も伊藤先生とともに、まさに「21世紀の人類の課題」に挑み続けてこられたからです。「環境」を経済学の概念として明確に定義し、理論的な枠

組みに入れ込み、経済変動のメカニズムのなかでどのような役割を果たし、社会にどのような影響をもたらしているのかを分析する。それが、理論家として宇沢が引き受けた役割だった。21世紀の人類の課題を、宇沢は終生手放さなかった。佐々木実「今を生きる思想 宇沢弘文 新たな資本主義の道を求めて」講談社現代新書、二〇二二年、九四頁。

(8) 伊藤誠『マルクスの思想と理論 青土社、二〇二〇年、第三章「共産党宣言」の現代的魅力」、九七頁。そこには、国際コンファレンスでの次のようなハーヴェイの発言が記載されています。「ここでわれわれが議論しているグローバルゼーションの基本は『共産党宣言』です。すでに指摘されている資本主義の発展傾向だと思う」。

(9) 当該論考のもととなった英語論文の掲載にあたり、イギリスのケンブリッジ大学教授ロバート・ローソンとインドのジャワハルラール・ネルー大学教授ジャヤッティ・ゴシシュの二名よりコメントが寄せられており、第七章巻末の「付記」で、それらの内容について伊藤先生の再コメントとあわせて記述されている。

(10) こうした論点のより簡明な解説は、伊藤誠『サブプライムから世界恐慌へ——新自由主義の終焉とこれからの世界』青土社、二〇〇九年、第四章「金融恐慌の政治経済学」が参考になります。伊藤先生はハイマン・ミンスキーの金融不安定性論の特徴と意義、限界を概観しながら、次のように主張されています。「ケインズやポストケインジアンが心理的で主観的な流動性選好やポートフォリオの選択理論に重点をおき、金融市場の変化に関心を集中する傾向があるのにたいし、マルクスの考察は客観的な資本蓄積の動態に注目し、産業と金融の両面の有機的関連の変転を景気循環と恐慌の局面の交替をつうじて説明しようとしている」(同上書、一一六—一一七頁)。

(11) 伊藤先生自身が「二一世紀型社会主義」についての思索と考究をより推し進めるきわめて大きな契機となったのは、二〇〇七—八年のサブプライム世界恐慌であったと思われます。副題に「新自由主義の終焉とこれからの世界」をもつ『サブプライムから世界恐慌へ』青土社、二〇〇九年、第五章「世界のゆくえ」の最終節「社会主義の再生」をあらためて読み直しても、そう強く感じるころです。ただし、本書のなかでは、「二一世紀型社会主義」という表現はまだ登場していません。

(12) ここでいわれている「宇野—伊藤問題」は、以下に述べるような「宇沢—岩井問題」を意識して、私が呼称したものです。すなわち「宇沢問題」ないしは「宇沢—岩井問題」とは、自由放任主義に理論的基礎を与える新古典派経済学への批判および新古典派経済学からの脱却という「冷徹な頭脳」と、正義感にもとづく自由放任主義批判という「温かい心」とのあいだのギャップのことであり、このギャップのあいだで宇沢先生は長らく葛藤されてきました。その大いなる「葛藤」こそが、宇沢先生を師の一人とする岩井克人先生の研究姿勢に色濃く深い影響を及ぼし続けてきたのであり、それがいわば未解決の「宇沢—岩井問題」として存続しているのです。岩井克人『経済学の宇宙』日本経済新聞出版社、二〇一五年、補遺「不均衡動学」の現代版に挑む」が所収された文庫版、二〇二二年、第二章を参照してください。

(13) このパートの副題は、「M・デザイ、M・ドップ、B・ローソンらとの対話」とあります。なかでもとりわけ銘記してお

きたいのは、ケンブリッジのマルクス経済学者であったモーリス・ドップ（一九〇〇—一九七六）と伊藤先生との「対話」でしよう。盟友であるピエロ・スラッファによる『商品による商品の生産』が一九六〇年に刊行され、客観的価値論の意義を復権させたスラッファの当該著書を高く評価し、主観的価値論と客観的価値論の理論的対抗関係を主軸とする経済学説史の系譜を体系的にとりまとめたのがドップの『価値と分配の理論』一九七三年、です。伊藤先生は本書を読んでドップに手紙を書き、ドップからすぐに返事をもらい、本書をめぐっての計三度にわたる「対話」が実現したのです。その後、ドップは一九七六年に亡くなり、伊藤先生は「追悼」文を書かれています。そのなかにある次のような一文は、私にはとても印象深く思われます。「やや小柄なドップは、挨拶がすむと、大きな机の奥にゆったりと腰をおちつけ、温厚な物腰で机の上のシガレットをすすめたのち、話をはじめると、私を若い研究者仲間としてまったく対等に遇してくれた」。伊藤誠「モーリス・ドップを偲ぶ」『リカーディアーナ』一九七八年、No.10、七—九頁。

（14） 以下については、注3で言及されている私の伊藤先生への「追悼」文とあわせて、伊藤先生の『資本論』と現代世界——マルクス理論家の追憶から』への「読後感」である、塚本恭章「マルクス経済学の理論家による記憶と記録」「情況」情況出版、二〇二三年一月、第六期一卷第四号、二七九—二八一頁、を参照してください。